
見つけて騎士（ナイト）さま

あじゅ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

見つけて騎士さま^{ナイト}

【Nコード】

N7226X

【作者名】

あじゆ

【あらすじ】

万理には小さい頃からよく見る夢があった。騎士と村娘の恋物語の夢。でも二人が出会ったところから全く進展しない。先が気になるのに！そんなある日、不良に絡まれている男子生徒を助けようと思ったら逆に助けられて、なぜかその子に懐かれてしまった。ちょっと勘弁してよ。正義感強いけど淡泊少女な先輩と、仔犬系男子な後輩とのファンタジー？現代？ちょっと不思議な恋物語。の予定です。超不定期更新。作者の気まぐれで更新されるので、更新頻度はひどくまちまちになると思われます。

1 マリアと万理（前書き）

ずっと温めてきたものですが、書き上げていませんので更新は不定期になります。よろしく願います。

1 マリアと万理

マリアは元気で明るい女の子です。小さな村で楽しい人たちに囲まれて、毎日楽しく暮らしていました。

マリアの日課は、森の中に行つて薬草やキノコを取ってくることです。その日はとてもいい天気で、緑の木々が日の光でキラキラ輝いていました。気分がとてもよくなったマリアは、歌を歌いながら森の中を歩きました。

そんなとき、森の奥からおおきな影が現れました。

「きゃあ！」

それは熊でした。熊はマリアに向かってきます。

「助けて！」

そう叫ぶと、誰かに身体を引っ張られました。そのまますごい勢いでどこかに連れて行かれます。熊は見る見るうちに小さくなって行きました。ちよつとして、マリアは馬にのっているのだと気付きました。

「大丈夫ですか？」

馬が喋った！と思ったら馬に乗っている人がマリアに話しかけていました。その人は、お日様の光を集めたようにキラキラ輝いている男の人でした。鎧を身につけているので、恐らく騎士様でしょう。

それが、マリアの運命の人でした。

*

「だー！もう！」

寝起きに叫んだ私は、壁の向こうから聞こえる妹の「うるさい！」という声に「わるかったわねー！」と返事をした。

またあの夢だ。

私、久瀬万理^{くぜ まり}には、昔から何度も見ている夢がある。三流のお伽噺みたいなベッタベタな騎士と村娘との恋物語の夢だ。しかも、お粗末なモノローグというオマケつきである。物心ついたときから数えて、もう何度見たかわからない。

この夢の厄介な所は、結末どころか冒頭から先に、全く話が進展しないところ。何回も見ているのは騎士と村娘が会おう場面だけ。その先にあるだろうロマンスがまったくない。私の想像力の問題なのかと思ってその手の恋愛小説を何冊が読んでみたこともあったが、結果は変わらず、マリアが騎士様と運命的な出会いをした場面しか見ることができない。先が気になるのは人間の性だ。いつまで経っても進展しない物語に、私は苛々していた。

もう私も十八歳になる。いつまでもこんなメルヘンな夢をみているわけにはいかない。さつさとこの夢から卒業してしまいたい。寝る度に夢が進展することを期待して、起きる度に落胆することにはいい加減飽きた。

「万理ー！早くおりてきなさい」

「はい！」

階下からの母の声に応えて、夏用の半そでの制服に着替え、手早く身支度をして、階段を下りた。台所では、小学生の妹が既にテーブルで朝食のトーストにかじりついている。

「お姉ちゃん、今日もうるさかったよ」

私も席に着いてトーストにバターを塗っていたら、非難がましい視線を妹からもらった。私の隣の部屋は妹の部屋だ。壁がそんなに厚くないので、あれくらい叫べば筒抜けだろう。件の夢を見る度に溜まる苛々を叫んで吐きだしている私に、妹はほとほと迷惑しているらしい。よく母に部屋替えを申し出ている。

「悪かったわよ。あと半年したら出てくから、それまで我慢して」

「それってお姉ちゃんが大学に合格したらの話でしょー。合格しなかったら後一年とちよつとあるじゃん！」

「縁起でもないこと言わないで」

「大丈夫よー、万理は頭いいもの。ねえ？」

呑気な母親は呑気にそう言った。この母は子供のことを過大評価する節がある。それに助けられた面も大きい。時々期待とかいろんなものが重いなあと思うときもなくもない。しかし、仮に私が大学に落ちたとして、呑気な母は「きつと運が悪かったのよ」と笑うような気もするけど。

トーストを食べ終わる頃、父が降りてきた。まだパジャマ姿の父は眠そうにあくびをすると、「コーヒー」と主語も述語もない単語の科白を言いながら席に着いた。私の隣に。母は父のコーヒーを淹れに行った。

「顔くらい洗ってきたら？お父さん」

「そうだなあ……」

眠そうだ。父は昨日、私たちが寝入ったような時間に帰って来たらしいので、仕様がないだろう。

そんな父の前にコーヒーが置かれた。父は機械的にそれを口に持っていて。淹れてくれた母に礼くらい言えればいいのに、と思うが、父と母の間にそう言ったものは不要らしい。母はコーヒーを飲んで父を見てニコニコしている。未だ恋する乙女のように父が大好きらしい母は、こんな隙がありまくりのだらしのない父も“かっこいい”と形容するツワモノだ。父が母を同じくらい好きなのかは不明だが、大事にしているのは何となくわかる。

理想ではないけれど、将来はこんな夫婦になれたらいいな、と目標にしたくなる二人だ。

「お姉ちゃん、時間」

「え？」

妹に言われて時計を見ると、バスの時間が迫っていた。わっと驚いて立ち上がり、ソファの所に置いておいた鞆をひつつかんでリビングを出る。

「万理、いつてらっしゃーい」

「いつてきまーす！」

母ののんびりした声に見送られて、玄関を飛び出た。自慢の脚力を使い全速力で歩道を駆け抜け、徒歩十五分の距離にあるバス停まで五分で辿り着いた。すごいぞ私！しかし息が上がって胸が痛い。ぜーぜーと女らしからぬ息遣いでバス待ちの最後尾に並ぶと、ポンと背中を叩かれた。振り返ると、ショートヘアで私と同じ制服を着ている少女がにっこり笑っている。

「万理、ぎりぎりだね」

「あんたも人のこと言えないでしょう」

クラスメイトの川辺依子^{かわべ よりこ}だ。人懐っこい笑顔と、猫を彷彿とさせる丸くてちよっとつり気味の目が可愛い。背も低めだ。庇護欲をそそられると言うのはこういう子のことを言っただろう。彼女と並んだ私と言えば、背はそこまで高くないが百六十に届かないくらいで、低くもない。顔つきは決して悪くないと思うけど、平凡だ。性格も強気を絵に描いたようなものであるため、男子受けは悪い。そのおかげで、今まで彼氏が出来たことはない。そこまで必要性を感じていないけれど。逆に女子受けは割といいので、私はそれなり

に満足していた。

そうこうしている間に、バスがやってきた。依子と一緒に乗りこんで、朝のラッシュは混んでいるので座れなかった二人は並んで立った。私の目線の辺りで依子のつむじがふらふら揺れている。撫で回したくなる。

「そういえば、知ってる？二年に転校生が来たって」

依子が視線をこちらにやらず話しかけてきた。横並びなので視線をやりにくいのだ。

「ああ、そう言えばそんなこと噂になってたね。夏休み明けに来たって」

「どんな子だろうね。男の子かな、女の子かな」

「男って聞いたけど」

「男の子かー、かつこいいかな？」

「さあね。漫画とかのセオリーだと、謎の美少年転校生とか期待しちゃうけど」

「なにそれー」

おかしそうに笑う依子と笑い合っていると、目的のバス停に着いた。今日も一日学校だと思つと憂鬱な気分になるが、仕方ない。

そして飛んで放課後。掃除当番だった私は最後のゴミ捨てじゃんけんに負け、一人でゴミ箱を抱えて校舎裏の焼却炉へ向かっていた。これを捨てたら帰って、大好きなアイスを食べて、それから受験勉強をしよう。むしろしなければいけない。

しかし、何で私はこうもじゃんけんが弱いのだろう。このゴミ捨てじゃんけんに勝った試しがない。もしかして、運がない星の下に生まれてしまったのだろうか。どうか受験のときはその星が光り輝きませんように！

まだ星が見えない空に向かって念じていたら、妙な声が聞こえた。焼却炉の方だ。ゴミ箱を抱えた格好で校舎に沿って歩いていた私は、一度足を止めて遠くにある焼却炉へと目を凝らす。

この学校の男子生徒が数人、焼却炉の所にいた。それだけならいいんだけど、あれって、明らかに不良が一般生徒に絡んでいる場面にはしか見えない。さっき聞こえた声は不良の「金出せよー、オラオラ」的な科白だったのだろうか。この距離だと、声は聞こえても何と言っているかわからない。

不良の男子生徒は四人で、一人の生徒を囲んでいた。明るい髪色の生徒は、囲まれて弱腰に見えた。弱い者いじめの場面そのものだ。

こういう場面に出会った場合、利口な人は多分スルーするんだろう。ゴミ捨てなんて明日の朝にやっつけてしまえばいいんだし、クラスのみんなも理由を話せばゴミ捨てをしていないことを咎めはしない。

だけど、私はそういう意味じゃ利口な方じゃない。昔からでしゃばりで有名だった。弱い者いじめを見つけたら、それが男の子だろうが女の子だろうがお節介にも手を出して毎回場をめちゃくちゃにして来た。幼少期はそのせいで友達が少なかったけど、この歳にもなるとそう言う場面自体少なくなってきた人間関係は良好だ。

話がそれたけど、要は、私はそういうお節介な奴だってことである。

「ちよつと、何してるの？」

声が十分届く距離まで彼らに近づいて、そう声をかけた。ゴミ箱を抱えた姿は間抜けだと思ったので、足もとに置いた。

「ああ？」

不良らしいステレオタイプな巻き舌で、四人のうち一人が反応した。顎を上げた姿勢でこちらを見下ろしている。それで自分を大きく見せているつもりなのだろうか。

「何だよ？」

「聞いているのはこつちよ、質問に答えなさい。それとも、日本語わからなかったかしら？」

こういうとき、よくあるヒーローみたいに囲まれている生徒の前に立って、「助けに来たよ」みたいなことは女の私には出来ない。だから不良の注意を私に引きつけるのが常套手段だ。その隙に囲まれていた生徒が逃げたら、それを見届けて私も全速力で逃げればい

い。中学時代に陸上部の短距離で県大会優勝をしている私の足に、だばだばしたズボンをはいた不良が追いつけるわけない。多少体力が落ちたけれど、まだ速さはあるはずだ。ここは学校だし、職員室に逃げ込めば万事オッケーだ。もし職員室にまで乗り込んできた場合は、先生たちが何とかしてくれるだろう。

「んだと、このアマ！」

案の定、不良は私の挑発的な言葉に引っ掛かってくれた。幸いなことに四人全員で私を取り囲んでくれている。

「アマ？私は出家した記憶はないんだけど」

さらにニヤツと笑って言えば効果抜群だろう。今のうちに逃げろ、と視線で弱腰だった生徒に示そうと思ったら、唐突に手を掴まれた。思ったよりも不良たちとの距離が詰まっていたみたいだ。不良の一人につかまってしまった。

「ちょっと、やめて！」

「ふざけんじゃねーよ、馬鹿にしゃがって」

男の力は強い。そんなの分かり切っていたことだけど、どうやってもほどこないそれにひやっと冷たいものが背中に伝う。恐怖と焦りが一気に襲ってきた。

「お、三年だぜ、こいつ」

「先輩、俺たちと遊びたいんですかあ？」

ネクタイの色で学年を判別したらしい不良が、妙なねこなで声でそう言ってきた。鳥肌が立つ。どうやってこの状況から抜け出ようか頭が次々に考えるけど、恐怖で身体がしびれてしまったように動かない。冷や汗がひどい。

力を込めて掴まれた腕を引っ張っても一向に離してくれない。むしろ力が込められていくようで、ぎりぎり絞められているような気がする。どうしよう、どうすればいい。

そのとき、私から一番遠い位置にいた不良が、ぶっ倒れた。

「え？」

私が発した驚きは他の不良のそれと重なった。倒れた不良の方を見ると、さっきまで弱腰で不良に囲まれていたはずの男子生徒が、その横にしゃがみこんでいる。抱いていた恐怖が一瞬で吹き飛ばさず、その光景は衝撃的だった。

もしかして、足払いでもしたんだろうか。

その現場を見ていないためよくわからなかったが、状況を見るにそう予想するのが妥当だ。

「てめ、何しやがる！」

そう言ったのは誰だったか。ぶっ倒れた不良が起き上がる前に、男子生徒は次の不良に頭突きをかました。がっとな鈍い音がする。ひるんだ不良の横をすり抜けて私の腕を掴んでいる男に、男子生徒はグーパンを入れた。

「……ッ」

これがまた見事なもので、不良は一発で伸びてその場に倒れ込んだ。私を掴んでいた手も離される。残り一人が男子生徒に襲いかかろうとしていたが、彼はこれまた華麗な回し蹴りでそいつの横つ面を叩き、不良は数メートル吹っ飛んだ。人って飛べるのか、とそのときの私は呑気にそんなことを考えていた。それを見届けると、男子生徒は私の手を掴んで走り出す。状況が飲みこめていない私は、その力に逆らうことなく彼に従って走り出した。

弱い者いじめの現場に居合わせたと思ったのに。彼の背中を見つめて走りながら沸き上がった疑問の後、私は助けられたんだと気付いた。

どれくらい走ったのか忘れるほど走って、ようやく男子生徒と私は立ち止まった。周りの景色を見まわして、ここが学校近くの河原であることを認識する。

「だ、大丈夫、ですか……？」

男子生徒がまだ整わない息のまま、そう聞いてきた。私も相当息が上がっているが、彼もそうらしい。声を出す余裕もない私は、無言でそれに頷く。「よかった……」と呟いた男子生徒は、ドサリとその場に座り込んでしまう。

「ホント、びっくりしたあ……。先輩、もお、驚かせないでくださいよ」

そう言いたいのは私の方なんだけど、まだ声は出せそうにない。先輩、と呼ばれて彼を見ると、ネクタイの色が二年生を示していた。

あの不良共と同学年らしい。

まだ胸が苦しい。しゃがんで咳き込んでいると、背中をさすられた。なんだか情けない。

そこで気付いたのは、彼の手が震えていること。驚いて彼の顔を見ると、心なしか顔色が悪い。

「大丈夫、夫……？」

何とか整った息でそう聞けば、「大丈夫じゃないですよ」となぜか怒気が含まれた科白が返ってきた。私の背中をさすっていた手はいつの間にか彼の胸の前に移動していて、何かを堪えるように握られている。

「何であんなことしたんですか」

さっきまで息が上がっていたとは思えないほど、はつきりとした響きだった。彼の鋭い視線に射抜かれて、思わず怯む。だけど負けじと彼を睨んだ。こういうところが可愛くないのだろうな。

「だって、見過ごせないでしょ？」

「無視しちゃえば、あんな怖い思いせずに済んだじゃないですか」

「そうだけど、私にはそれが出来ないの」

「どうして」

「そんなの、私が一番知りたいわよ」

何で私、こんな初対面の子と口喧嘩しているんだろう。結果として助けられてしまったけれど、助けようとした子に何で文句を言われなきゃいけないんだろう。沸々と怒りが湧いて来て、その感情を隠しもせずに言葉にのせた。

「君こそ、なんであんな風に絡まれていたの？あれくらい見事に不良を伸せるんだから、さっさとやってしまえばよかったじゃない」

聞いても、彼はむすつとしていた。答えたくないのか、そう思ったが、なぜか彼の手がゆっくりと私の方に向かってくる。両の手のひらを彼の大きな手が包んだのを見て、やっと私は我に帰った。

「何するの」

怪訝な顔を向けると、さらに手がぎゅっと握られる。意味がわからなかった。

「僕、恐かったんですよ」

「そうなの？」

だからあんな弱腰に見えたのか、と納得していたら、すぐさま否定の言葉が聞こえた。

「違います」

「どっちよ」

「先輩が現れるまでは恐いなんて思ってませんでしたよ。早くどっ

が行け、くらいでした。だけど先輩がきて、あいつらが先輩の手掴んだの見たら、急に、恐くなって。先輩が怪我するかもって思ったら、恐くて……」

何かを吐きだすように、彼はそう言った。まるで独白みたいだ。ふと見た彼の顔は先ほどまでの拗ねたような表情ではなくて、苦悩を示すように眉間にしわが寄っていた。

「おかしいですね、初対面なのに。こんな風に思うなんて」

「そうね、おかしいわ」

「……否定してくださいよ」

「私、嘘はつかないことにしているから」

「…そうですか」

また彼はむすっとした。こっちの方が年相応の顔で、彼に似合っている。そう思ったら妙に安心してしまって、彼に対する怒りが霧散していった。

彼は私のために不良を殴ってここまで逃げてくれた恩人だ。よく考えれば、喧嘩している場合ではない。彼に掛けるのに最もふさわしい言葉を、私はまだ口にしていなかった。

「ありがとう、助けてくれて」

私は感情がすぐに顔に出る方だ。だから、たぶん笑って言えたと思う。彼はちよっと目を見開いた後、なぜか俯いた。そんなに落ち

込まれるような顔をしていたのだろうか。平凡だとは思うが、がっかりするような顔つきはしていないぞ。

「あの、僕、羽月宗司^{はづき そうじ}って言います。先輩は？」

彼はそう言っで顔を近づけてきた。心なしか赤くなっている。そうか、走ってきたものな。

「久瀬万理よ。よろしく」

「万理さん！よろしくお願いします。宗司って呼んでください！」

さん付けって。高校の先輩後輩同士だと珍しい呼び方だ。礼儀に欠いているわけではないし、私はわざわざ指摘するのはやめた。

「家まで送りますね。どこですか」

「大丈夫よ。一人で帰れるわ」

「ダメです！もう暗くなりますよ。それに、お姫様を守るのが騎士^{ナイト}の務めですからね」

何臭いこと言ってるのかしら、この子。
？

1 マリアと万理（後書き）

一話目が妙に長いのは、ヒーロー君を出したかったからです。

騎士と村娘のベッタベタな恋愛も大好きですが、ちょっとひねった作品を書いてみました。恋愛小説になっているかかなり不安です。よろしく願います。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7226x/>

見つけて騎士（ナイト）さま

2011年10月19日02時05分発行